The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本・中国・西洋音楽文化の重層的対話
Author(s)	仲, 万美子
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40112
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【10】

氏　　名	仲（なか）　万美子（まみこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　12902　号
学位授与年月日	平成9年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学位論文名	**日本・中国・西洋音楽文化の重層的対話**
論文審査委員	（主査） 教　授　山口　修 （副査） 教　授　原田　平作　　教　授　天野　文雄

論文内容の要旨

本論文は，日本と中国が西洋近代の音楽を一方的に受容していたのではなく，西洋と東洋がいわば「双方向的な対話」を重ね，相互に影響を与えあっていたという作業仮説を実証的に論証する試みである。19世紀末から20世紀初頭の日本と中国には数多くの音楽研究者や作曲家，演奏家が西洋から来訪した。比較的豊富に入手することのできる資料を検討して彼らの活動の足跡をたどると，中国人あるいは日本人も加わって西洋風の音楽を演奏したり作曲する場が多彩に繰り広げられていたことがわかる。両国でのそのような状況を同時代史として語るのが本論文の骨子である。このような比較文化論的考察のためには，単に音楽現象のみにとらわれるのではなく，近代化の過程で表面化しつつあった社会思潮との関連において音楽の問題を把握することが肝要である。この時期の現象としては，異文化接触の結果進行した文化触変（acculturation)の過程で，伝統文化との摩擦が生じたり，新しい文化形態が生まれてきたことが顕著に見られる。その様相が，新たに形成されつつあった都市社会文化においてどのように位置づけられていたのかを描き出すことも本論文で試みている。

複数の文化が接触し，変化が起きる，すなわち「文化触変」の過程には，そこに関わる文化のあいだにある支配従属関係や，主観的な意識に根差した文化の優劣関係がその内面に存在している場合が多いことは否めない。近代アジアが旧来の姿から脱して新たな文化を形成してゆく過程においても，色濃く「進化論的」時代思潮が影響を及ぼしてきた。現在では，文化相対主義により，たとえば西洋近代において成立し「自文化優先主義的尺度」が濃厚であった「音楽学」においても，世界の音楽を研究対象の射程にいれる傾向が強まるにつれ，研究の視点を見直すことが顕著になってきた。本論文は，そのような傾向を率直に受けとめて，アジア近代史を音楽の領域を中心にして現代的な観点から再検討することを目的としている。

論文は大きく2部から成っている。第Ⅰ部「文化触変期における文化をはかる尺度の意味－『日本音楽』に対する内・外の視座の交錯」では，1870年代から1920年代にかけて出版された日本音楽研究の足跡を概観する。ここでいう「日本音楽」とは，千有余年かけて形成されてきた「純邦楽」と，近代になり変容の道をたどりつつあった新しい意味での「日本の音楽」を包含している。それらが近代西洋音楽とどのような出会いをしたのかを確認するのである。すなわち，近代西洋芸術音楽の熟成とともに成立した「音楽学」がいちはやく導入されていたこの時期に，日本の伝統音楽文化をどのように捉えていたかを問う。

日本音楽の研究の足跡を如実に示す「語られ書きとめられた史料」を批判的に吟味してゆくことにより，音楽文化

のなかで創造行為とともに進行し，同時に文化触変の受け手側に生じた文化変容の動向を，文化の「内」，「外」という観点でモデル化することができる。しかし「内」「外」というモデルはあくまで観念上の類型論であって，現実には両方の視座が複雑に交錯しながら新たなる文化が形成されたことを論者は弁えている。

具体的には，西洋諸語で書かれた文献を中心にして日本音楽研究の動向を探ることにより，旋律（メロディー），リズム，ハーモニーという「音楽の3要素」に照らし合わせて「日本音楽」に迫ろうとした両視座の形成過程を考察する。まず，①体験に基づく内・外の視座の交錯があったことを，実証的態度が濃厚なA．エリス（1814－1890）の影響を受けた人たちや，日本に滞在して理解を深めたF．ピゴット（1852－1925）の研究例から浮き彫りにする。つぎに，②観念に基づく内・外の視座の交錯としては，H．リーマン（1849－1919）に典型的に認められる「外なる外の目」，田中正平（1862－1945）の態度としての「内なる外の目」，謎の人物A．ウエスタール（？－？）がもっていた「外なる内の目」，さらに，伊庭孝が心がけていた「内なる内の目」，それぞれが存在したことを指摘する。この時期には，西洋人は日本文化を観察する際に「下位」から「上位」へと方向を転じていたのである。対照的に，日本では「進化論的」観念から脱却できず，次々と進入してくる「新しい理論」を吸収するだけだった。そして，「新しい音楽」を形成する際に「新しい理論」を応用することに関心が集中し，結局，日本の音楽文化を「客観化」できずに終わったと言える。

第Ⅱ部「文化触変期における文化交差の諸相」では，中国の事例をも組み込んで，西洋との関係をいわば「三角測量」的に考察する。すなわち，日本と類似する状況におかれていた中国において西洋の音楽や演劇がどのように受容されていたかを，日本との相関関係に着目して，関係した諸民族の文化意識や社会的脈絡に照らし合わせて探究するのである。この方法を導入することにより，西洋と東洋のあいだで交わされた文化間コミュニケーションの問題に切り込むことが可能となり，受容だけでなく相互に文化発信地であったことが次第に明らかになってゆく。

日清戦争前後から，近代化驀進中の日本へ多くの中国人が来日し，日本というフィルターを通して西洋芸術文化を母国に定着させる努力がはらわれていたことはよく知られている。ただし，少し時代をさかのぼって江戸時代後期の状況を見ると，逆に中国を経由して日本が西洋文化を学んでいたことも判明する。その両国に保存されている史料，さらにヨーロッパへ渡った両国の研究者の研究の足跡を示す史料を総括的に取扱う。

Ⅱ－1「音文化の交差，異文化と自文化の共存」では，プロテスタント系キリスト教音楽の受容を主に扱う。そこには，社会の多層性をもたらした文化現象があったので，両国の社会構造を考慮し，それぞれの文化脈絡のなかでキリスト教音楽の受容を論じることができる。ここでは，プロテスタントの賛美歌編纂にみる文化交差の様相を「文化脈絡の変換」と言う視点から考察した。その結果，そこには二つのレベルの「脈絡変換　transcontextualisation」（山口修　1995）が積極的に推進されることにより，交差性をもって新しい文化が産出されていたことが指摘できる。すなわちある楽曲がキリスト教音楽という本来の「文化脈絡」を超え，新たな脈絡としての「教育音楽」の世界に定着したのである。両国の合同賛美歌編纂時期には30～50年前後の開きがあり，この間に日本で編纂された「唱歌」が中国に伝播し「学堂楽歌（xuetang yuege)」となった流れが存在する。実は，その賛美歌には学校唱歌が含まれるかたちで送り込まれていた。また両国それぞれに，民謡や伝統楽曲などを「自文化」の脈絡から賛美歌という「異文化」的な脈絡へ変換し，定着させ，そして二種類の文化融合がはかられたのである。

Ⅱ－2「社会的枠組みからみた異文化の往還－作曲家・演奏家・聴衆が織り成したもの」では，音楽史学と民族音楽学の融合を方法として試みる。すなわち，従来，西洋音楽史学のフィールドで考察されてきた日本近代西洋音楽史の事象を，体系的音楽学の代表である「民族音楽学」の地平から分析することを試みる。T．ライスの提唱した「個人の創作と体験，歴史的構築，社会的維持」という3項目の相関性から成る「民族音楽研究」のモデルを論者なりに変形し，「文化の静態と動態（異文化間／同文化内，中心と周縁)」「歴史的構築（伝統，演奏慣習，歴史的事実，研究)」「創作と表演（個人／集団)」「社会的維持（社会システム／聴衆)」という4つの双方向性の関係から考察する研究モデルを工夫している。

具体的な事例としては，オペラ受容史とその上演にかかわった作曲家山田耕筰（1886－1965），演奏家三浦環（1884－1951）をモデルにし，貴族性と庶民性という芸術のもつ両極性，人間性のなかに見られる両極性，社会システムにみられる両極性を通して，考察をおこなう。また，西洋芸術の上演空間に関わる近代日本音楽文化史を位置づけるために，D．ショスタコーヴィチ（1906－1975）の受容に着目し，社会現象としての「ブーム」を軸に考察する。

Ⅱ－3「受容される異文化概念のダイナミズム」では，異文化と出会った結果，新たな文化創造が着手される際に見られる諸概念の導入の問題を考察する。まず，その概念導入のダイナミズムを捉えるにあたって，中国のオペラや演劇と伝統戯曲に関わる概念を融合してゆく過程で観察される「揺れ動き」に注目する。すなわち西洋音楽そのものだけでなく，総合芸術としてのオペラや近代演劇の理論が中国に導入されていたので，伝統演劇にも少なからぬ影響を与えているのである。より具体的には，京劇の役者でもあり，中国での伝統演劇，話劇（huaju,日本で言う新劇），そして歌劇学校の創設にも尽力を果たした王泊生の研究・啓蒙活動に着目し，また梅蘭芳（1894－1961），程硯秋（1904－1958）による海外公演の際に示した西洋人の反応を通して内・外から入り乱れる諸概念の揺れ動きを考察する。

さらに視点を現代にも移動させ，いわゆる「ワールドミュージック」隆盛のさなかで，エイジアンポップスの発信基地になりつつある日中のポピュラー音楽の動態の一端を考察する。中国や日本で花開くエイジアンポップスをポピュラー音楽研究家や民族音楽研究者がどのように捉えているかを取り上げ，そこに言及されている音楽現象の背景を歴史的に振り返る。また，それぞれの社会的脈絡に位置づけられた時のポピュラー音楽や民族・民俗音楽が示す本質と異質性について考察する。さらに20世紀初頭ヨーロッパ各地で展開された各種の「民謡」研究や運動の平行現象とも受けとめることができる中日両国における受容史に絡ませながら，一般大衆への西洋音楽文化受容の特質の一端を概観する。

以上のように，日中両国の音楽のみならず演劇なども含めた表演芸術（パフォーミングアーツ）が歩んできた近代化の足跡を一定の方法で歴史として構築することができる。その際，文化触変期の受動的な動態だけがあったのではなく，東アジア文化圏が西洋に対して文化発信基地となっていたことも確認できる。この成果により，西洋近代音楽史に対してアジア近代音楽史が重なり合う位相を探り当てることができる。

本文191頁（１頁＝40字×30行）　400字詰原稿用紙換算約570枚
凡例，要旨（日本語，英語），abstract（日本語，英語）等　計20頁
別冊（文献一覧，引用原文一覧等）　77頁

論文審査の結果の要旨

幕末，明治，大正，そして昭和時代を歴史的に捉える機運が，さまざまな学問領域で高まっている。そこでは，キーワードとしての「近代化」がしばしば「欧米化」と同義語であるかのように捉えられがちであるが，欧米においても「近代化」は進行していたことが忘れられやすい。しかも，欧米における近代化には，ジャポニズムをはじめとするエキゾティシズムが重要な契機として認められる。異文化の接触は，一方が他方を圧倒するかたちで文化触変をひきおこすとは限らないのであって，むしろ相互に影響しあいながらダイナミックな文化変容を双方にもたらすことを，本論文は数多くの事例と緻密な分析によって実証している。

本論文の第二の特長としては，比較文化を二点間ではなく，三点間でおこなったことが挙げられる。従来の比較文化論は，たとえば日本と西ヨーロッパしか扱わなくても，東洋と西洋を全面的に比較したかのように提示されることが多かった。二点を三点に増やせばこの問題がすぐに解決できるものではないにしても，点を二から三へ増やしたときに得られる視野の拡大，および個々の深い理解ははかりしれないものがある。もちろん，比較の視点を増加させるからには，比較の必然性がなければならないのであるが，本論文の論者はこのことを十分に弁えており，西洋と対峙する日本と中国という思考軸をしっかりと立てていることが高く評価される。

第三に，分析のための理論的な枠組み，すなわち複数の文化を比較する方法を設定するにあたり，音楽学のみならずいくつかの隣接学問で示されている先行研究のモデルを吟味したうえで，本論文に効果的に活用すべく自らのモデルに組み立て直しているので，論旨および分析結果はきわめて明快である。

本論文の第四の特長としては，長年の努力により，多量の一次資料（史料）を集積し，研究のサブテーマ毎に秩序だった整理をおこなっていることを挙げることができる。独自の方法とコンピュータの活用で体系的にカタログ化し

た結果，そこに提示される書誌および複数事項間の相関関係は，それ自体で読者に多くの事柄を語りかけてくれる二次資料となっている。一次資料からの引用は，論文中では当然限定された回数と量で処理されているが，文献表をたどることにより，引用されなかった内容もある程度推定できるし，読者が望むなら直接アプローチできるように配慮されているのも，周到な処置である。

こうして，論文の問題設定，方法提示，資料収集，データ分析，そして総合的把握という一連の手続きは申し分なくとられている反面，論文としての短所も見られる。第一に，メインテーマに即した考察が第Ⅰ部では明快に展開されている反面，第Ⅱ部ではテーマから離れた論旨が見受けられ，やや散漫になっていると言わざるを得ない。豊富な資料を盛り込むことよりも，テーマとの関連で取捨選択がもっとなされてしかるべきであった。

第二の短所は，読者の容易な読解をさまたげる表現と文の組み立ての点で改善の余地があるということである。すぐれた論文であれば，たとえ内容が複雑であっても読者のスムースな読みを誘うものとなるはずで，本論文が出版される暁には，推敲を重ねることが要望される。しかしながら，この短所は，時間をかけて推敲すれば解決する類のものであり，学界に対する貢献度の高い本研究の価値を損なうものではない。

よって本研究科委員会は，本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。